

立原道造
色鉛筆で綴る盛岡

インタビュー

皮肉ビューモアの写真家
マーティン・パー

芸術新潮

10

江

戸ならば広重、パリならばユトリロ、ヴェネツィアならばカナレット。そんなふうに、ある都市の魅力を特定の画家の絵を介して経験することってあるけれど、ニューヨークの場合はどうなんだろう。230頁を超える今回のニューヨーク美術館特集には、この街で見られる絵や彫刻、この街で活躍したアーティストたちの作品が何百となく

並ぶのに、街の情景そのものを描いた絵はじつはまったく見当たらない。「芸術新潮」の誌面だけの話ではないと思う。半世紀以上にわたる世界美術の中心地にして意外ながら、ニューヨークにはたぶんそうした絵描きはいないのだ。絵画ではなく写真や映画の中でこそ、この街は聖なる輝きを放ってきたのだか

ら。と、こんなことを言うのも、もちろんひとりの例外的な画家を紹介したいからだ。トム・クリストファーである。

「街を歩いているうちに、ビルの谷間から真っ青な空が目にとびこんできました。ブロードウェイがまっすぐに延びていて、凍とした強い日差しがミッドタウンのストリートに落ちていたんです、そう、まるでレーザー光線のように。ある画家の言葉通りでした。路肩に注がれた光が立体交差していたんです」

カリフォルニアで生まれ育ったトム・クリストファーが、ニューヨークに魅せられたのは、まずなによりもその独特な光の効果によってだという。はてしなく広がる西海岸の柔らかな光ではなく、「強く、ぱりぱりして、



【上】《Best Jump Trick Ever》 2007年
油彩、カンヴァス 91.5×91.5cm
【下】《*%*#! Monkey's》 2006年
油彩、カンヴァス 122×91.5cm

【左頁】《A View of His Future Co-Workers》 2007年
油彩、カンヴァス 122×152.5cm
【下】《Last Call For Jack》 2007年
油彩、カンヴァス 122×122cm

